

## 長島愛生園現地研修会

平成十六年十月十七日、笠岡市人権ふれあい事業のなかで、ハンセン病と人権について考える現地研修会が、国立療養所長島愛生園（岡山県瀬戸内市邑久町）で行われました。参加された方の感想を、ここに紹介します。

「長島愛生園現地研修会に  
参加して」

重見 裕子

平成十三年、国は過去の誤った隔離政策を認め、ハンセン病患者、元患者の人たちに謝罪し、名誉回復、社会復帰支援策をとるようになりました。

それにもかかわらず、つい昨年、熊本県の温泉において宿泊拒否事件が起きました。この事件は、患者、元患者を拒否、排除する人権侵害として大きく取り上げられました。また身近なところでも、岡山県の温泉において盲ろう者友の会に対する宿泊予約拒否問題が起きるなど、差別意識や偏見により、様々な人権が侵害されています。

差別意識、偏見をもつことは恥ずかしいことだとわかっていても、知らないうちに相手に対してそうして

いることだってあると思います。私自身の人権感覚を問い直すため、そしてハンセン病についてより深く知るためには、長島に行くのが一番ではないかと思ひ、人権ふれあい事業現地研修会に参加しました。



秋晴れの一日、バスの中で、人権教育推進室長さんからハンセン病と長島愛生園についてあらかじめ教えていた大きな小島の印象がありました。長島大橋を渡り、島に入って行きました。はじめて見る長島は海に面したのどかな小島の印象がありました。バスの到着を待っていてくださった金泰九さん（七八歳）の案内で歴史館に入り、愛生園の概況、ハンセ

ン病についてのビデオや資料を見せたいいただきました。

金さんは韓国生まれであること、日本に来て後に発病したこと、「らい予防法」により家族と離れ、ひとり愛生園に連れてこられた日のこと、人が人として扱われない生活を強いられ、差別され続けてきた療養所のくらし、そして現在に至るまでを、淡々と話してくださいました。

金さんは後遺症が残った手足が少し不自由そうでしたが、熱く話してくださいました。そして今、故郷を想いながら話される金さんはとても穏やかな方でした。



その後、実際に園内を歩いて、当時、金さんたちが強制的に連れて来られた棧橋、最初に入られたクレゾール入りの風呂あと、職員に反抗的な者が入れられたという、塀だけになった監房あと、高台にある鐘つき堂、亡くなっていった人が葬られている納骨堂などを案内してもらいながら、この島に来た人たちがどんな思いで、どのように過ごしてこられたのか、辛く悲しい過去の情景が眼に見えるようでした。無念のまま亡くなっていた人たち、今もこの島で懸命に生きておられる人たちのことを知りました。

不治の病と言われていたハンセン病も治療薬の開発と適切な治療で確実に治るようになりました。私も含めて言えることですが、ハンセン病について、知らない、分からないといった、いいえ、知ろうとしない、分かってほしいという面があるのではないのでしょうか。長島に行つて現地研修を行い、私にも正しい知識と理解をもつことができたように感じました。

これからは、ハンセン病元患者の人たちとどう向き合っていくか、思いのかが私たちの課題のように思いました。